

# 24 集落営農組織を核とした地域のにぎわい創出

## ■ 東條地域農業集団 ■

(小豆農業改良普及センター 横山 良樹)

### ●対象の概要

小豆島町安田地区の東條地域農業集団(代表者:古川安則、構成員:30戸)は、昭和58年から62年にかけて取り組んだ水田のほ場整備事業を契機に組織化された集落営農組織である。基盤整備前、地権者165名であったが、それを現時点では耕作者30名に利用権を集約している。

約15haのほ場でコシヒカリを栽培し、集団独自ブランド「安田の郷」販売を核として、産地交流市場、学童の農作業体験等を実施し、地域のにぎわいを創出している。

### ●課題を取り上げた理由

農業者の高齢化と地域の過疎化が進む中、同集団は地域の財産である農地を地域で守り、次の世代へ継承しなければならないとの意識が強い。

そこで、「活気あふれる心豊かなむらづくり」を目指すことになった。農業者だけでなく、地域住民、さらには、地域外住民の理解が不可欠であることから、その交流促進を支援する必要があった。

また米づくりでは、「食べて美味しく、人と環境にやさしく」を目標とし、その技術的支援と経営安定を図るためブランド化を図る必要があった。このお米は経営安定のため独自ブランド化し、近隣住民を中心に販売している。

### ●普及活動の経過

#### 1 農地の有効利用への支援

農業者の高齢化等で耕作を中断するケースが発生しているが、農業委員会や町と協力して、新たな耕作者へ引きつがれるよう調整を行ってきた。

#### 2 米の高品質化への支援

構成員と話し合い、米づくりの目標を「人と環境にやさしく美味しく」とし栽培技術の向上に取り組んでいる。

農作物生産の基本である「土」の状態を確認するため、毎年土壌分析を行い、その結果に基づき肥培管理を指導している。

また、収穫物の品質をきちんと把握し、次年度への改善点を見い出すために、構成員全員が品質・食味調査を受けるよう誘導した。

そして、品質・食味調査結果は、構成員がお互いに研鑽できるようデータを共有し、その状況を確認している。その結果をもとに次年度の栽培技術の課題を解決するための講習会を開催している。

#### 3 次世代育成への支援

先人が築いてきた農地と生産環境を地域の貴重な共有財産として次世代に引き継がなければならないとの意識が強い。そこで、幅広く地域を支える次世代育成のため、地区内幼稚園・小学校とも連携し農作業体験や食育活動を実施できるよう支援した。

#### 4 環境保全の取組支援

地域の環境を守るには、地域住民の理解が不可欠との観点から、地域内の農業施設(農道・水路・ため池等)の補修・点検活動を地域住民と協力して取り組めるよう助言した。

さらに、小学生に自分たちの生活環境やたんぼ周辺の生物の多様性を知ってもらうために調査活動を一緒に取り組んでいる。これら活動に対して支援するとともに、活動の円滑化のために、各種補助事業への取組誘導を図ってきた。



安田小学生との生物調査

#### 5 にぎわい創出支援

集団内だけでなく、地域住民との交流を図り地域のにぎわいを創出しようと交流促進施設としての「ファームステーション安田の郷」を建設する際には、グリーンツーリズム関連の補助事業を活用できるよう支援した。

さらに、同施設を産地交流市場として活用することと

なり、販売する野菜生産についての技術講習会の開催を通事、地域のにぎわい拠点となるよう支援している。

## ●普及活動の成果

### 1 農地の有効利用への支援

～耕作放棄地を作らない～

基盤整備が完了してから28年が経過し、近年では、高齢化によって耕作を中止する農業者もいるが、集団及び関係機関との連携調整によって、担い手へのさらなる集約が進み、遊休農地は全くない状況が継続されている。

### 2 米の高品質・高付加価値化への支援

～人と環境にやさしく美味しいお米づくり～

米の高品質化を支援する一方で、農地・水・環境保全事業やエコファーマー制度の導入を誘導したことにより、「人と環境に優しく美味しい米づくり」の実践が可能になった。すなわち、生物農薬等を利用するとともに、害虫の確認防除技術を導入した。そのことにより、化学合成農薬使用量は6成分と地域基準(16成分)の半分以下に減らすことができた。

また、レンゲをすき込むことで河川への流亡等で環境へ影響がある化学肥料を使用しない無化学肥料栽培にも取り組むようになった。これらのことが高付加価値となり有利販売も可能となった。

### 3 次世代育成への支援

～食育活動・農作業体験～

地区内幼稚園・小学校との連携により始まった農作業体験や食育活動は、年を迎え、地域の恒例行事となった。

今では、小学生のリクエストで田んぼでの「どろんこ祭り」を実施し、小学生だけでなく、集団構成員、学校関係者もみんなで楽しい時間を過ごしている。どろんこまみれになり、土と戯れた時間は彼らに非常に貴重な、



どろんこ祭り(安田幼稚園)

そして重要な体験となっている。

さらに、子供自らが田植えし、収穫したモチ米で、おはぎを作ったり、餅つきをして収穫の喜びをみんなでわかち分かちあうようにもなった。

### 4 環境保全への支援

～農道や水路の清掃・生物調査～

地域内の農業施設の補修・点検活動は地域住民との協力で取り組めるようになり、また、小学生との生物調査活動も取り組むなど、地域をあげての環境保全の活動に結びついた。

### 5 賑わい創出への支援

～地域の賑わいと地域内外の交流促進～

関係事業の活用により、収穫の喜びを地域住民とともに喜び合える収穫祭が可能になった。収穫祭では独自ブランドである「安田の郷」販売はもちろん、おにぎりの試食、野菜の販売、もち投げなど多彩な催し物で参加者に喜んでもらっている。

また、地域住民との交流の場としての「ファームステーション安田の郷」では、毎週土曜日の午前中、産地交流市場を開設し、多くの人で賑わっている。

このように、農地の有効利用、高品質な米づくり、食育活動や地域で取り組む環境保全、収穫祭を始めとする地域内外との交流など幅広い活動は、地域の賑わいを創出するようになった。

## ●今後の普及活動の課題

### 1 安全・安心なお米づくりの栽培技術の向上

これまで以上に安心して買ってもらえるよう、より安全でより美味しい米生産のための栽培技術の向上が必要である。

### 2 水稲レンゲすき込み栽培技術の確立

米の食味・品質を低下させることなく、しかも収量を確保できる「レンゲすき込み栽培」の技術を確立する必要がある。

### 3 農作業受委託の推進

今後の高齢化、担い手不足を踏まえ、労力軽減・コスト低減や周辺地域での活動も視野に入れた作業受託組織の育成が必要である。

### 4 米加工品の開発

これからも収益を確保し、農地を持続して活用するため、生産されたお米の加工品開発に取り組む。